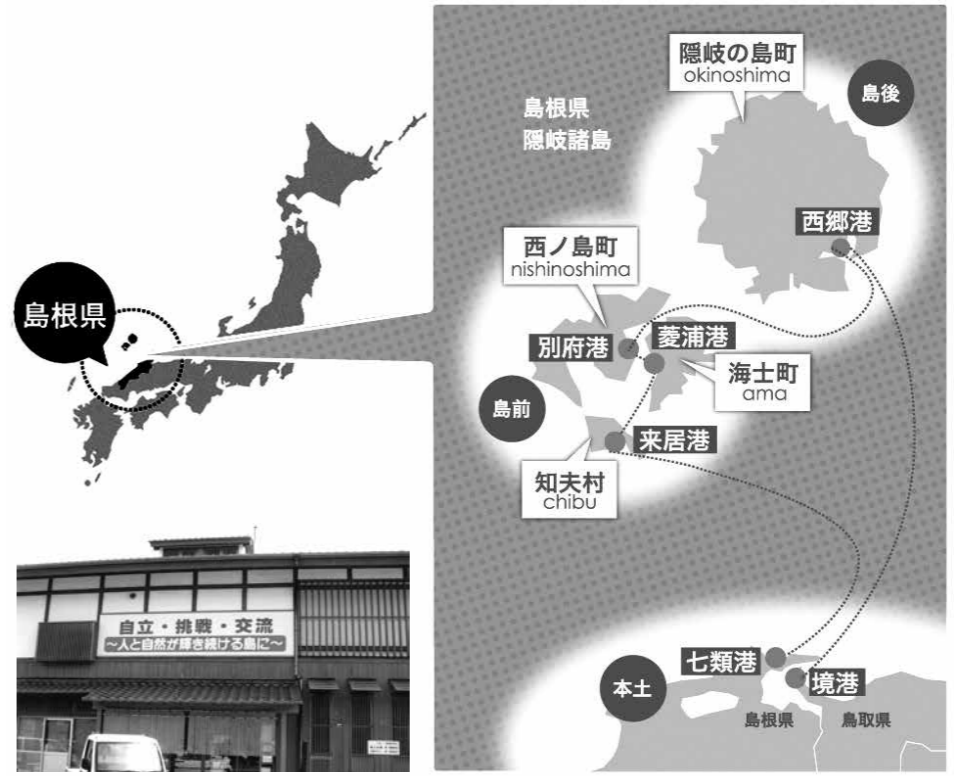


「離島」海士町のまちづくり

総務産業建設常任委員会は、昨年度来、町内の観光振興団体との意見交換会を数回実施し、観光・地域づくりなどの意見交換を行ってきた。

今回、地方創生、地域づくりの観点から、「自分たちの島は自分で守る」という気概で、住民代表、行政、議会とともに島の生き残りをかけた守りと攻めの「自立促進プラン（平成16年3月）」を策定された島根県海士町を訪問し、行財政改革や特産品開発、教育の魅力化プロジェクトなど独自の取り組みの研修を行った。

あわせて、同町の少子化対策、U・Iターン施策による人口増加に向けた取り組みなども研修を行った。



島根県海士町は、人口2,300人の離島であるが、そのうち「Iターン」「Uターン」の方々が384世帯・566人おられ、人口増加の魅力ある町として取り上げられている。

その「魅力」の詳細が、町長をはじめとした職員の人件費カット（行財政改革）、島ブランドの開発（産業振興）、島前高校の再生（高校魅力化プロジェクト）などがあげられる。

特に、島前3町村で唯一の高校である島前高校の存続に向けた取り組みは、島全体の存続に直結する壮絶な取り組みであったと感じた。

少子化の影響を受け、島前高校の入学者は平成9年77人から平成20年には28人に激減。高校がなくなると、島の子ども達は15歳で島外に出ざるを得なくなり、その仕送りなどの金銭的負担を考えると、家族こそっての転出も考えられ、まさに島の存続問題

として捉えられた。

- 実践的なまちづくりや商品開発などを通して地域づくりを担うリーダー育成を目指す「地域創造コース」と、少数で難関大学にも進学できる「特別進学コース」の開始
- 生徒が企画した地域活性に向けた観光プラン「ヒトツナギ」が観光甲子園でグランプリを受賞
- 学校連携型の「隠岐國学習センター」を創設
- 全国から意欲ある生徒の募集に向け、寮費・食費の補助などの「島留学」制度の新設

など、さまざまなプロジェクトの紹介があった。今では、全国から生徒が集まる地域・学校となり廃校の危機は免れているが、なお新しい取り組みを模索されている姿勢にも、大変感心した。

離島ゆえ、自らが考え自らが行動せざるを得ないと思いがあつたとのことだが、まず島に入港すると目にするのが「ないものはない」と書かれたポスターがいたるところに貼られていた。決して、ないものは仕方ないという考えではなく、ないものばかりを求めるのではなく、島にあるものに磨きをかけて様々な

「挑戦」を行っていかうこと、その実践が身になって現在の姿があることを実感した。

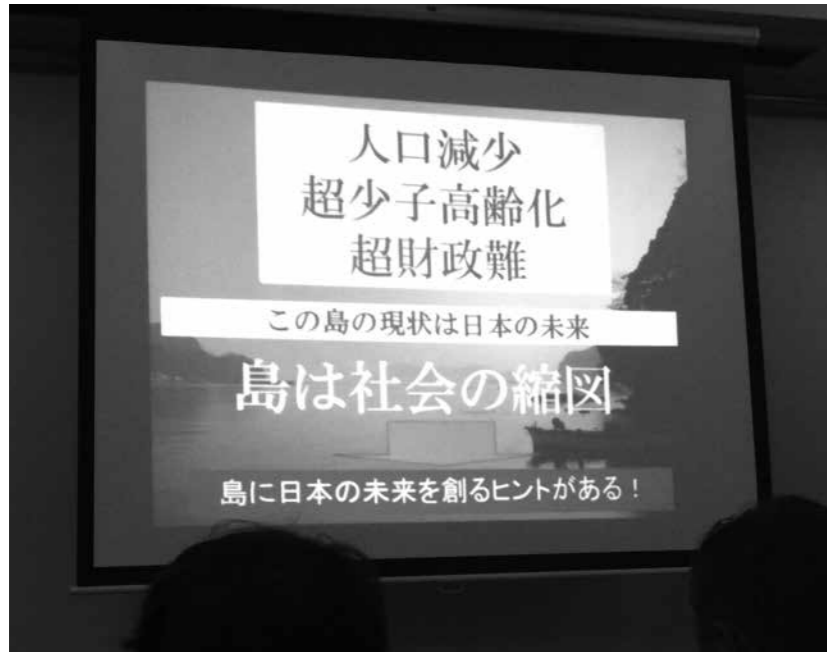
今回は本町の議会だけでなく、全国から6市町村議会30人の研修であったが、海士町職員の方の自信を持った説明、質疑に対する答弁が「自立」「挑戦」の裏付けである

と感じた。

また、全国から多数の視察がある中、多くの方々は「わが町の進もうとする方向に町民の理解がない」「議会の理解が得られない」「県が予算をつけてくれない」など、他人のせいにして取り組みに至らない言い訳ばかりが目立っているとの説明を受けた。海士町では、町の存続が危ぶまれたことから、町民が一丸となった取り組みが進められたが、本土の市町村は、本当の危機感がないのではないかと

愛荘町では、現在、観光分野だけでなく、福祉や教育も含め、様々な政策に取り組みされている。議会として、執行部への監視だけでなく、充分に意見をぶつけ合い、また町民・行政・議会が一丸となった町となるように進んでいきたいと感じた。

その他に、隠岐ユネスコ世界ジオパーク（隠岐の島町）や境港市内も視察を行った。今回は、視察先が離島であったことから、飛行機やフェリーの関係上、3泊4日という行程となり、議員も多額の自己負担を伴った。今回の研修



「離島発」海士町まちづくりの研修



隠岐島前高校 魅力化プロジェクト研修

を無駄にせず、今後の議員活動に活かしていくとともに、全議員が意見共有を図れるよう進めていきたい。

総務産業建設常任委員会

- 委員長 竹中 秀夫
- 副委員長 河村 善一
- 上林 村治
- 西澤 桂一
- 高橋 正夫
- 森 隆一
- 辰己 保